

図 国民生活を生涯にわたって支える社会保障制度

| 【保健・医療】 | | | |
|---------------|----------------|--------------------|--------------------------|
| 健康づくり 健康診断 | 健診、 母子健康手帳等 | 健診、未熟児医療、 予防接種等 | 事業主による健康診断 |
| 疾病治療 療養 | 医療保険(医療費保障) | | 特定健診・特定保健指導 高齢者 医療 |

| 【社会福祉等】 | | | |
|-----------------|-----------------------------------------------------------|--------------|------------------------------|
| 児童福祉 母子・寡婦福祉 | 保育所 | 放課後 児童クラブ | 介護保険 (在宅サービス、 施設サービス等) |
| | 地域の子育て支援 (全戸訪問・育児支援家庭訪問事業等) | | |
| 障害(児)者福祉 | 児童手当 | 児童扶養手当 | 保護を要する児童への 社会的養護等 |
| | ●在宅サービス(居宅介護、デイサービス、短期入所、補装具の給付等) | | |
| | ●社会参加促進(スポーツ振興等) ●施設サービス(障害者支援施設等) ●手当の支給(特別障害者手当等) | | |



| 【所得保障】 | |
|--------|-----------------------------------------|
| 年金制度 | 遺族年金 障害年金 老齢年金 |
| 生活保護 | 資産、能力等すべてを活用してもなお生活に困窮する者に対し、最低限度の生活を保障 |

| 【雇用】 | |
|------------------------|--------------------------------------|
| 労働力需給調整 | 職業紹介、職業相談等 |
| 労災保険 雇用保険 | 高齢者雇用 障害者雇用 働いて事故にあった時、失業した時など |
| 職業能力開発 | 公共職業訓練 労働者個人の自発的な職業能力開発を支援 |
| 男女雇用機会均等 仕事と生活の両立支援 | 男女雇用機会均等・育児休業・介護休業等 |
| 労働条件 | 最低限の労働条件や賃金を保障 労働者の安全衛生対策 |

「平成29年版 厚生労働白書」より編集部で一部加工

私たちの暮らしと関係する 社会保障制度

家族を含めたライフサイクルで考えよう

京都府立大学准教授 村田 隆史

社会保障制度が存在する意義

ここでのテーマは「私たちの暮らしと関係する社会保障」です。本テキストを手にとってくださっている方からすれば、「何を今さら」と思うかもしれませんが、普段の生活で社会保障制度との関係を強く意識しない人がいるのも事実です。それは人々の生活は多様であり、社会保障制度との関連もそれぞれだからです。まずは社会保障制度が存在する意義から確認していきましょう。

『平成29年版 厚生労働白書』に社会保障の役割が書かれています。少し長くなりますが引用します。白書では「私たちの人生には、自分や家族の病気、障害、失業、死亡など様々なリスクが潜んでおり、自立した生活が困難になるリスクを抱えている。健康で長生きすることは望ましいことであるが、誰にも自分の寿命はわからないため、老後の生活費が不足するリスクもある。また、将来の経済状況や社会状況の中には予測する

ことが困難な領域もある。このように、個人の力だけで備えることに限界がある生活上のリスクに対して、幾世代にもわたる社会全体で、国民の生涯にわたる生活を守っていくことが社会保障の役割である」(『平成29年版 厚生労働白書』7ページ)と社会保障制度の必要性に言及しています。

社会保障制度の機能についても、①生活安定・向上機能、②所得再分配機能、③経済安定機能を挙げています。①生活安定・向上機能については「生活のリスクに対応し、国民生活の安定を実現するものである」、②所得再分配機能については「社会全体で、低所得者の生活を支えるものである」、③経済安定機能については「経済変動の国民生活への影響を緩和し、経済を安定させる機能である」と解説しています(『平成29年版 厚生労働白書』8〜9ページ)。

いるということを確認しておきましょう。

「自分の暮らしと社会保障制度は関係ない」人はいない

私は仕事柄、大学生や若い世代を対象として社会保障制度について話をする機会がありますが、「自分の生活に社会保障制度は関係ない。税金や保険料を取られているだけだ」と主張する人に出会うことがあります。それは本当のことなのでしょうか。図のライフサイクルと社会保障制度の関連を用いて、確認してみましょう。

社会保障制度を表す言葉に「ゆりかごから墓場まで」というスローガンがあります。イギリス福祉国家の基礎を作り上げた概念です。図を見ると、私たちはゆりかごに乗る前から社会保障制度(母子保健や医療保険)と関わっていることがわかります。こじつけに思えるかもしれませんが、これは事実なのです。そして、乳児を対象とした社会保障制度を利用し、その保護者は児童手当を受給する

例えば、40歳代女性 A さんの場合…

ここに40歳代女性のAさんがいたとする。Aさんは高校卒業後に経済的理由で大学進学を断念した。その時期は不景気で、高校卒業後に正社員にはなれずに非正社員として働いていた。20歳代後半に結婚して2人の子ども（男子）を出産したが、40歳の時に離婚をして、実家に戻った。長男は生まれつき知的に障害を持っており、次男は学校でいじめられて不登校状態である。それでもAさんは実家の両親のサポートを受けながら、家事と仕事を両立していたが、父親が要介護状態になった。母親も病気がちなため、父親を介護する必要も出てきた。



本書を手にとってください。本書は、保健・医療・福祉関連の仕事をされているか、もしくは関心のある方だと思います。一度原点に戻って、図と自らの生活を照らし合わせながら「私たちの生活と社会保障制度が深く関わっていること」を実感していただければと思います。

ことになり。生まれてきた子どもが障害を持つている場合は、障害児を対象とした福祉サービスを利用することになります。「自分の暮らしと社会保障制度は関係ない」人はいないのです。

ただし、社会保障制度との関わり方は人によって異なります。先ほど「自分の暮らしと社会保障が関係ない」という若い世代の話をしました。バリバリ働いている若い世代で、小さい時から病気やケガもしたことがなく、両親も元気に暮らしていて、独身で子どもがいないという状況であれば、制度を利用することは少ないかもしれません。むしろ、毎月の給与から社会保険料や税金が引かれていることへの不満が大きいのもわかる気がします。ただ、本人も両親も元気でいてバリバリ働けるというのは長い人生の中で一定期間のことなのです。生涯にわたってみれば、社会保障制度が関係ないということはあり得ません。そして、多くの人々にとってはそれすらも困難であるからこそ、社会保障制度は公的責任の基に発展してきたのです。

個々人の生活でみれば、社会保障制度に関する負担と制度の利用（給付）の割合が異なるのも事実です。保険料を負担しているにも関わらず、医療や介護のサービスを利用していない人もいます。逆に、保険料を負担していても医療や介護のサービスを利用している人もいます。この事実が不平等感を生んでいることは理解できますが、社会保障制度は私的な助け合い（自助）や家族・地域・職域での助け合い（共助）の限界から、公的責任を重視して発展してきました。個々人の負担感やサービス給付の問題を考えていくことはもちろん重要ですが、システムとしての社会保障制度を自助や共助に戻していいのかはよく考えていきたいところです。

社会保障制度の範囲は 広くて複雑

社会保障制度の話をしていると、とにかく制度が複雑でわからないという意見を聞きます。そのために、本テキストは作られました。

の専門職養成（社会福祉士、精神保健福祉士、歯科衛生士、養護教諭、看護師、保健師、管理栄養士、理学療法士）に携わってきました。保健・医療・福祉の専門職を目指しているとはいえ、大学生なので自分の生活と社会保障制度の関連は多様です。そこで、私たちの生活（特にライフサイクル）と社会保障制度の関連を理解してもらおうために左のカコミの事例を出して

います（村田隆史「D福祉制度」辻一郎・吉池信夫編『社会・環境と健康（第6版）』南江堂、2020年、232〜233ページより抜粋）。前ページの図と照らし合わせて、社会保障制度との関連を考えてもらっています。そして、「皆さんが出会う一人の患者や利用者は1つの制度のことで困っているわけではない。複合的な課題を抱えている。だから、

た。言い訳に聞こえるかもしれませんが、社会保障制度を総合的に理解するのは困難であることは事実です。シンプルに社会保障制度のことを伝えたいとも思いますが、シンプルに伝えようとする重要な情報を削らなくてはなりません。社会保障制度を理解するために、制度を活用するということが重要です。制度はいつ必要になるかわかりません。だからこそ、日ごろから制度の動向を追っておく必要があります。

自治体から送られてくる広報やホームページもかなり丁寧な作りになっています。それを把握した上で、制度を利用することが理解を深めていくことにつながります。特に本テキストの読者は生活者としてのみではなく、労働者としても社会保障制度に関わっているという人も多いかと思えます。社会保障の範囲は広くて複雑だからこそ、日ごろから動向を注視し、実際に制度を利用し、制度の実態について実感するという中で理解が深まっていくと考えられます。このような書き方をすると、「結

社会保障制度を総合的に 捉える必要性 —ライフサイクルとの関連で

私はこれまで保健・医療・福祉

いる」ということは理解してもらっているようです。

ライフサイクルというと、私たちは自分の人生のみで物事を考えがちです。しかし、私たちは何かしらの集団に所属しています。生活との関連でいえば、家族がそれに当たるかもしれません。もちろん、家族の形態も多様です。それでも、自分の人生（ライフサイクル）と照らし合わせて社会保障制度との関連を考えること、現時点での自分の家族を含めたライフサイクルの中で社会保障制度との関連を考えることが必要なのではないでしょうか。